

平成 30 年 2 月 10 日（土）

飯盛城跡現地説明会資料

調査場所：大東市「千畳敷曲輪」・「南丸」、四條畷市「御体塚曲輪」

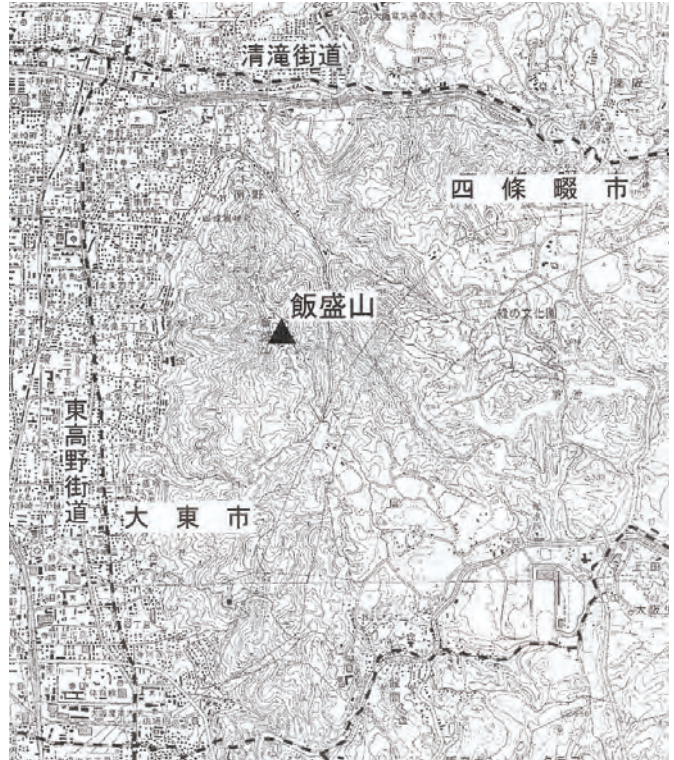
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会

1 はじめに

大東市と四條畷市では、平成 27 年度から飯盛城跡の国史跡の指定に向けて取り組んでいます。平成 28 年度からは飯盛城跡の規模や構造を明らかにするために測量調査（航空レーザー測量）、分布調査、発掘調査などを実施しています。

飯盛城跡は大東市・四條畷市にまたがる標高約 314m の飯盛山に築かれた山城で、城の範囲は東西約 400 m、南北約 650m を測り東は権現川、西は急峻な斜面によって守られています。

今年度は「御体塚」の発掘調査とその南東に築かれた石垣の測量調査、「南丸」と「千畳敷」の発掘調査を行っています。



2 調査の概要

四條畷市

【石垣の調査】

御体塚曲輪の南東側にある石垣 15 は、昨年度に調査した石垣 14 の西端から南へ屈曲して続く一連のものです。石垣の構造を確認・記録保存するために調査を実施しています。

【御体塚曲輪の調査】

三好長慶が仮埋葬されたと伝わる曲輪です。昨年度この北東斜面下の石垣調査で瓦が出土したため、構造物の有無を確認するためのトレンチ調査を実施しています。

大東市

「南丸」では曲輪と土塁の発掘調査を行いました。

曲輪は、地山の岩盤を削り出し、その土で盛土をして平坦面を広げ、造成していることがわかりました（第 8 トレンチ）。

土塁も同じように地山の岩盤を削り出して作られていることが明らかになりました（第 5 トレンチ・第 6 トレンチ・第 9 トレンチ）。

焼土層が見つかっており、その中からは土壁が出土しています。このことから南丸には土壁の建物が存在したと考えられます（第 7 トレンチ）。



犬形土製品 (第8トレンチ)



土壁 (第7トレンチ)



第6トレンチ 土塁



土師器小皿 (第6トレンチ)



南丸 調査地全景
(北から、右第8トレンチ、左第9トレンチ、中央奥第10トレンチ)

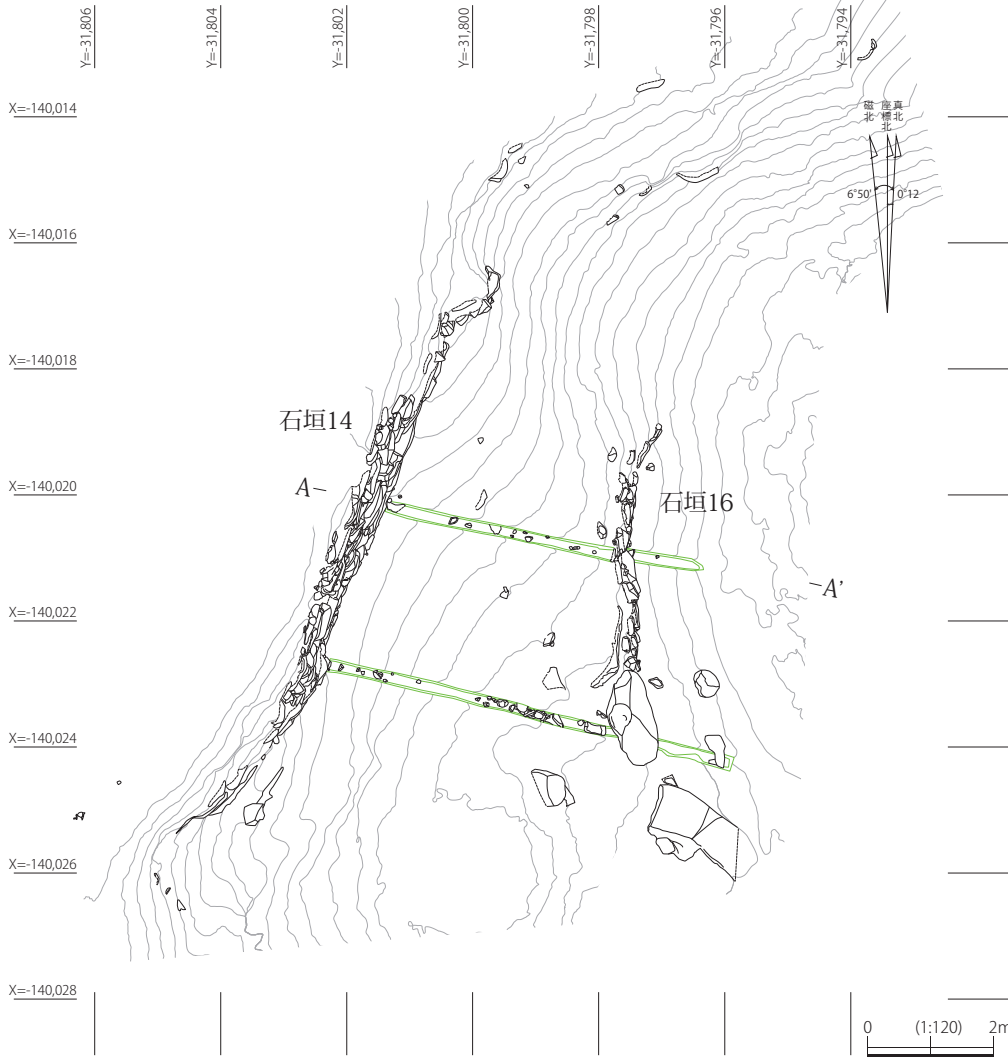


第8トレンチ 土を盛って広げた平坦面



第10トレンチ 曲輪1と曲輪2の斜面

四條畷市 平成28年度調査 石垣14・16 平面図



瓦



土師皿・灯明皿

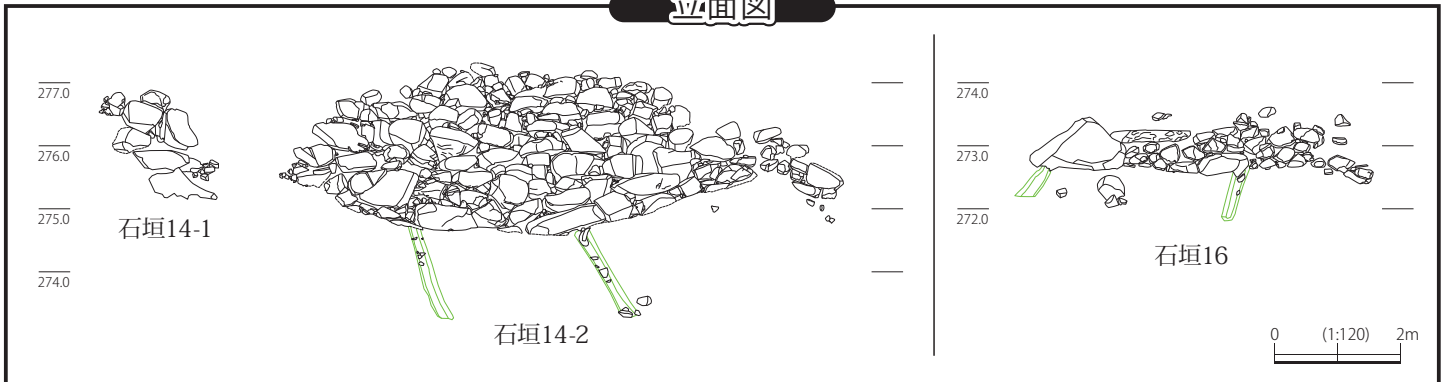
出土遺物

この図面は、昨年度調査した石垣14・16です。上の写真は、その際に出土した瓦と土師皿・灯明皿です。

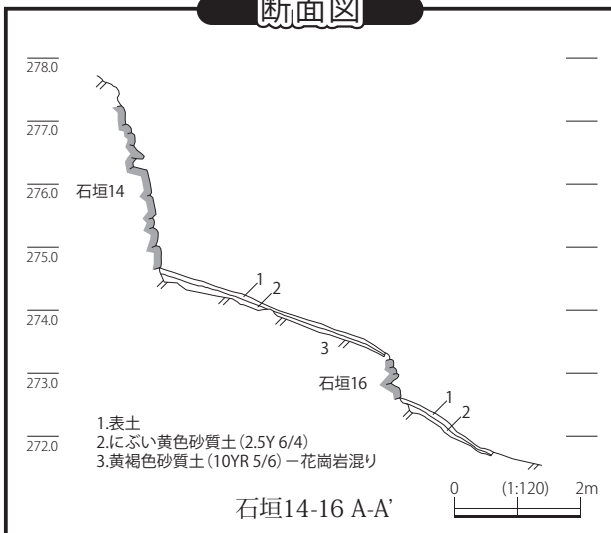
断面図から、この城の石垣は、その上部に構造物を築くには不都合なほど垂直に近い角度で積み上げられていることがわかります。

下の写真は、石垣14と一連のものと考えられる石垣15で、現在詳細な調査を進めています。

立面図



断面図



石垣15

【飯盛城の略年表】

1530 (享禄3) 頃	細川晴元被官・木沢長政、飯盛城を居城とする。
1531・32 (享禄4・5)	畠山義宣、木沢長政の飯盛城を攻撃。
1536 (天文5)	木沢長政、飯盛城から信貴山城(奈良県平群町)にうつる。
1537 (天文6)	木沢長政、畠山在氏を河内守護に擁立。飯盛城は守護所となる。
1542 (天文11)	木沢長政、遊佐・三好・本願寺と戦い、太平寺(柏原市)で敗死。ついで両軍が飯盛山麓で衝突。
1543 (天文12)	木沢の残党、飯盛城から大和方面に退く。
1551 (天文20)	安見宗房、河内守護代となり飯盛城に入城。
1560 (永禄3)	三好長慶、高屋城(羽曳野市)の畠山高政を破り、安見宗房を追放して河内を占領。芥川山城(高槻市)から飯盛城に入る。
1561 (永禄4)	三好長慶、飯盛城で連歌会(飯盛干句)を催す。
1562 (永禄5)	三好長慶、飯盛城で安見宗房や根来寺衆を迎え撃つ。
1564 (永禄7)	宣教師ヴィレラやロレンゾ、飯盛城で三好長慶の傘下73名を洗礼。
1567 (永禄10)	三好長慶、飯盛城で死去。養子の義継が家督を継ぐ。
1568 (永禄11)	飯盛城、三好義継に対抗する三好三人衆の手にわたる。
1569 (永禄12)	三好義継、将軍足利義昭から飯盛城を安堵される。
	三好義継、飯盛城から若江城(東大阪)にうつる。

【知っておきたい城の用語解説】

【曲輪 (くるわ)】

山城の中で、山頂や山腹などを削って平らにした場所。周辺は急な斜面や土塁、堀で守られていることが多く、兵士が駐在したり、建物が建っていた可能性の高い場所です。近世の城では「本丸」「二の丸」「三の丸」などと呼ばれていましたが、現在は、本丸のように城の中心となる曲輪のことを「主郭」、それ以外は「曲輪1」「曲輪2」のように表記するのが一般的です。

【切岸 (きりぎし)】

曲輪のまわりや、防衛の強化が必要な場所の斜面を削り、人工的に作った急斜面。切り立った崖のようにして敵が登ってくるのを防ぎます。

【土塁 (どるい)】

曲輪を囲んで積み上げた土壁。雨が降ると土が崩れるため、積み石で土止めをすることもあります。

【堀 (ほり)】

敵の侵入を防ぐために城の周りに掘られた溝。水が張られた堀を「水堀」、張られていない堀を「空堀」と呼び、近世の平城には水堀が作られましたが、中世では空堀が一般的です。山の周囲に流れる川を「天然の堀」として利用する例もあります。

【堀切 (ほりきり)】

山の尾根に作られた堀。尾根は最も山を登りやすいところなので、敵の侵攻を妨ぐために、尾根を断ち切るような形で掘られる山城の基本的な堀です。ふつうは、水が張られていない「空堀」でした。

【土橋 (どばし)】

堀切を渡るために架けられた土の橋。木で出来た橋を架ける場合もありました。堀切で遮断している状態は戦うときには有効ですが、普段は人が通行するため橋があるほうが便利だったことがうかがえます。敵が攻めてきたときには、木橋を落として防御しました。

【堅堀 (たてぼり)】

尾根伝いに攻める以外に、山の斜面を回り込んで攻め登る敵を防ぐために、斜面に掘られた堀のこと。もとは堀切を延長するように斜面に伸ばしたものから始まり、やがて斜面を横に移動しにくくするために単独でも作られるようになりました。斜面に3本以上の堅堀を並べて一面を覆ったものは畝状空堀(群)と呼ばれます。

【横堀 (よこぼり)】

曲輪に沿った堀のこと。平地の城館では早くから建物の周囲に堀を設けていましたが、もともと堅固な山に作られていた山城では、曲輪の周りに堀を掘ることはあまりなく、横堀は戦国時代になって登場しました。

【虎口 (こぐち)】

曲輪の出入り口。城兵の出入りのために土塁や堀が途切れており、弱点を補うため、守りやすく、攻め出しやすいように工夫されました。戦国時代の終わりに発達した虎口の設計は、「柵形虎口」などの複雑な様式を数多くうみだしました。

